

浜松領域の異なる多職種連携による在宅医療・介護連携推進事業 ～神経難病療養者が住みやすい浜松を創る～（第2期）

代表者：河野貴大（看護学部）

分担者：吉本好延（リハビリテーション学部理学療法学科）

連携機関：加納江理（静岡県立大学看護学部）、
赤石ゆかり、小出弘寿、松下太一（北斗わかば病院）

【背景】

パーキンソン病や筋萎縮性側索硬化症などの神経難病は進行性であり、神経変性をきたす神経の系統や支配する身体部位により様々な症状・障害を呈する。現在、病院の機能分化や在院日数の短縮などにより、神経難病療養者は在宅で過ごすことが主体となっている一方で、実際に在宅療養を支援する訪問看護師は病状のアセスメントや判断、介護サービスの調整などに不安や困難感、負担感を抱いており、先行研究においても同様に報告されている。

申請者らは2018年度より「神経難病支援者の会」を発足し、在宅療養者が病期に応じて必要な支援を受けることができるように、支援者のスキルアップを目的とした研修会や交流会の企画・運営を行っている。支援者の会のメンバーは、病院看護師や訪問看護師、理学療法士や作業療法士、社会福祉士、薬剤師など多施設・多職種の専門家で構成されており、隔月会議を行い、神経難病療養者の在宅支援について情報共有や課題の抽出を行っている。

2022年度の第1期ではコミュニケーション支援に関する研修会を3回、呼吸リハビリテーションに関する研修会を1回、服薬管理に関する研修会を1回と計5回の研修会を実施した。研修会後のアンケートでは、「研修会をもっと頻回に開催してほしい」、「定期的に実技研修をしてもらいたい」などの意見が聞かれ、在宅療養支援者に対する学習機会の確保は喫緊の課題であることが再認識された。そこで2023年度にも事業を継続し、支援者同士が交流できる機会の確保や知識・技術向上のための研修会を実施することとした。また、神経難病療養者が住みやすい浜松を創るためには、専門職者への支援だけでなく、将来の在宅医療・介護を担う学生に対しても理解を広めていく必要がある。そのため、第2期では県内の大学・専門学生にも研修会への参加を呼びかけ、学生が地域で暮らす神経難病療養者の生活や、専門職者の連携を学ぶ機会にしていきたいと考えた。

【目的】

本事業の目的は、地域の神経難病療養者に対する在宅ケアの質を向上し、療養者と家族が安心して地域で暮らせるようになることである。2022年度（第1期）の状況を踏まえ、2023年度は以下の3つを目標とした。

- 1) 神経難病療養者の在宅療養に携わる支援者の知識・技術の向上
- 2) 神経難病療養者の支援に関わる多職種間の「相談しやすい関係づくり」の推進
- 3) これからの浜松市の在宅医療・介護を担う学生が地域における専門職の連携を学ぶ

【方法・実施内容】

神経難病療養者を支えるネットワーク作りのための多職種交流を兼ね、病期に応じた医療・在宅サービスや福祉用具・機器についての理解を深めるための研修会を2種類、計3回開催した。各研修会終了後には研修会の質向上を目的にWEB上で回答する任意のアンケートを実施した。また、研修会の企画・運営や地域の課題に関する情報共有のため、専門職による会議を隔月開催した。

①神経難病療養者とのコミュニケーションに関する研修会

日時：2023年7月22日（土）、23日（日）13：00～17：00

場所：北斗わかば病院 南棟2階リハビリテーション室

対象：県内医療系学生（大学・専門学校）

在宅領域を中心に医療・介護・福祉に関わるすべての職種

講師：NPO法人 ICT救助隊

内容：ICTを活用したコミュニケーション支援に関する講義の後、研修会の参加者を4グループに分け、4つのブース（透明文字盤の体験、視線入力装置の操作体験、オリジナル入力スイッチの体験、iPadを活用した入力体験）をそれぞれ30分ずつ体験した。

②神経難病療養者のよりよい支援を目指してー課題整理のツールを使った事例検討会ー

日時：2024年2月16日（金）18：30～20：00

場所：オンライン（Zoom）

対象：訪問看護ステーションスタッフ、ケアマネジャー、神経難病療養者に関わる医療従事者

講師：北斗わかば病院 赤石ゆかり

事例提供：訪問看護ステーション高丘 水野彰子

内容：講師による講義・ツールの解説の後、事例の紹介が行われた。参加者は事例についてツールを用いて課題の整理を行い、グループに分かれて討議および全体の共有を行った。

【結果・実施後の評価】

①神経難病療養者とのコミュニケーションに関する研修会

研修会は県内の医療系学生を対象とした研修会（7/22）と専門職者を対象とした研修会（7/23）の2日に分けて実施した。

7月22日（土）の参加者は26名で、学生20名と看護師5名、作業療法士1名であった（表1）。学生は3つの大学から参加していた。学生は他大学の学生とも積極的に交流し、透明文字盤や視線入力装置の操作を体験していた（図1、2）。研修会後のアンケートでは、有意義な時間であったかという問いに対し、回答のあった22名のうち「大変良かった」と回答している者が19名（86.4%）、

「良かった」と回答している者が3名（13.6%）であった。自由記載では、「コミュニケーションツールそのものやそれらの利用者に合わせた工夫などを知ることができ、大変勉強になった」や「視線入力の便利さも実感出来たが、少し行っただけで眼の疲労を感じた。患者様の疲労や苦労について、体験したことでより理解出来た」といった意見が聞かれた。また、学生からは「この様な手段があるということ、今後看護師として医療を提供する中で、選択肢として知っておくことで、さらに患者さんに寄り添うことができる、力になれると思いました」という意見もあった。

表1. 医療系学生を対象とした
コミュニケーションに関する研修会
7/22（土）参加者の職種

職種	人数（n=26）
学生（看護学部）	20
看護師	5
作業療法士	1



図1. ICT救助隊による講義



図2. 視線入力装置の操作体験

専門職者を対象とした7月23日（日）の参加者は31名であった。職種は、看護師が11名、作業療法士が11名、言語聴覚士が4名、理学療法士が3名、介護福祉士が1名、ケアマネジャーが1名であった（表2）。

参加者らは講義の後、実際に透明文字盤を体験したり（図3）、重度障害者用意思伝達装置で分身ロボットの「OriHime」（株式会社オリイ研究所）を体験した（図4）。研修会後のアンケートでは、有意義な時間であったかという問いに対し回答のあった23名のうち「大変良かった」と回答した者が22名（95.7%）であった。自由記載では、「コミュニケーション機器も苦手意識が先行してしまうのですが、実際に体験することができとてもわかりやすかったです」や、「透明文字盤は初めて使いましたが、お互いに慣れるまで時間がかかると実感できました。視線入力は、想像を上回り使い勝手が良かったです」等の意見があった。また、「他の病院・施設の方と情報共有できていい刺激をもらった」と研修会が交流の機会になったという意見も聞かれた。

表2. 専門職者を対象とした
コミュニケーションに関する研修会
7/23（日）参加者の職種

職種	人数 (n = 31)
看護師	11
理学療法士	3
作業療法士	11
言語聴覚士	4
介護福祉士	1
ケアマネジャー	1

今後の要望についての記載では、「患者さまはAndroidのタブレットを持っている方も多いため、Androidでもできることについて知りたい」や「四肢が使えない方のタブレットの首振り機能、AIアシスタントの応用などを知りたい」など、実際の支援における困りごとが具体的に挙げられていた。



図3. 透明文字盤の体験



図4. 分身ロボットの操作体験

② 神経難病療養者のよりよい支援を目指して—課題整理のツールを使った事例検討会—

公益財団法人東京都医学総合研究所難病ケア看護ユニットの原口道子氏が開発した「訪問看護のための難病看護事例検討ツール—看護の糸口をさぐる—」※を活用し、オンラインで事例検討会を行った。参加者は20名で、職種は看護師が10名、理学療法士・作業療法士・言語聴覚士が7名、ケアマネジャーが2名、薬剤師が1名であった（表3）。

本事例検討会で使用したツールは、難病療養者の療養生活支援をすすめるなかで支援に疑問や難しさを感じたときに一旦立ち止まり情報や課題を整理するためのツールであり、公益財団法人東京都医学総合研究所のホームページから誰でも無料でダウンロードし活用することができるものである。訪問看護ステーション高丘の水野彰子氏に事例を提供してもらい、参加者とオンライン上で事例の状況について、グループワークや課題の共有を行った。

実施後のアンケートでは有意義な時間であったかという問いに対し、回答のあった14名のうち「大変良かった」と回答している者が8名（57.1%）、「良かった」と回答した者が6名（42.9%）であった。自由記載では、「課題解決のためのこのようなツールがあることを初めて知った」や「ツールを使って文字化されることでそれぞれの職種が共有することで同じ方向を向いて支援できると思った」、「ケアプランより具体的で書きやすい」といった意見があった。また、開催方法について、「オンライン開催のため移動の負担なく多くの人と関わることができて良かった」という意見も見られた。

今後の要望についての記載では、「このように事例共有できると良い」や「勉強する機会となるので、これからも研修会を定期的に開催して欲しい」といった意見があった。

上記研修会に加え、専門職による会議を2023年度内で計8回（4月、5月、6月、8月、10月、11月、1月、2月）実施した。会議のメンバーは病院看護師や訪問看護師、理学療法士や作業療法士、社会福祉士、薬剤師、大学教員等であり、研修会の企画・調整を行うとともに地域の課題の共有を行った。会議では、現在の浜松市内の神経難病療養者の療養課題および支援者のニーズについてのディスカッションが行われ、「神経難病支援者の会」として作成したチラシの配布や内容の更新についても検討された。

【考察および今後の課題】

2023年度に実施した研修会では、いずれも参加者の満足度は高く、有意義な時間であったと回答している参加者が多かった。コミュニケーション機器は、神経難病療養者にとって意思を伝えるため非常に重要なツールであるが、支援者側は疾患の希少性等の理由により機器に触れる機会が少なく、苦手意識を持っていることが少なくない。また、コミュニケーション機器は日々開発・進歩しており、常に最新の情報を得るための研修会は非常に重要である。このような研修会は実際に透明文字盤や視線入力装置を体験して

表3.神経難病療養者のよりよい支援を目指して—課題整理のツールを使った事例検討会—参加者の職種

職種	人数 (n=20)
看護師	10
理学療法士 作業療法士 言語聴覚士	7
ケアマネジャー	2
薬剤師	1



※「訪問看護のための難病看護事例検討ツール—看護の糸口をさぐる—」

(<https://nambyocare.jp/product/product2#2-7>)

いくため、オンラインでの開催や多人数での実施は難しく、今後も継続的に研修会を開催していくことが必要である。さらに、2023年度は医療系大学の学生のための研修会も開催することができた。大学生にとって、他大学の学生や専門職との交流は視野を広げ、自身のキャリアを考えるうえでも良い機会になると考えられる。コミュニケーション機器を体験し、関心を持つことで、地域に暮らす神経難病療養者への理解が進むことも期待でき、神経難病療養者が住みやすい浜松を創ることにつながっていくものと思われる。次年度は医療系の大学生だけでなく、高校生や中学生に向けた研修会や交流会も計画し、神経難病療養者の暮らしを知ってもらおう活動も徐々に広めていきたい。

課題整理のツールを使った事例検討会では、オンライン上で多くの参加者と話し合い、交流することができた。参加者のなかにはこのような研修会に初めて参加したと話す者もあり、日々業務が忙しい在宅療養支援者にとって移動の手間が不要なオンラインでの開催は大きなメリットであったと考えられる。また、事例検討会のグループワークを通して同職種・多職種と悩みの相談や連絡先を交換している様子も見られ、多職種が施設の枠を越えて交流する機会の確保は非常に重要であると再確認することができた。

以上のことから、2023年度の目標は概ね達成できたと言える。次年度以降も本事業を継続し、地域の神経難病療養者に対する在宅ケアの質向上を目指していきたい。